

## 東広島市長者スクモ塚第2号古墳測量調査

永野智朗

### 1. はじめに

長者スクモ塚第2号古墳は広島県東広島市西条町御菌宇に所在する（第1図）。当古墳は本誌において報告する長者スクモ塚第1号古墳<sup>(1)</sup>の北側に位置しており、第1号古墳と同じく1996年の測量調査によって墳丘測量図が作成されていた<sup>(2)</sup>。

近年、広島大学考古学研究室では広島県内における帆立貝形古墳の調査研究を行っている（村田ほか2014、平尾・池西ほか2015、池西・近藤ほか2016、池西・實盛ほか2016、下江・永野ほか2018）。当古墳は帆立貝形古墳ではないものの、帆立貝形古墳の可能性のある長者スクモ塚第1号古墳と隣接して築造されており、すでに1950年代には埋葬施設である箱形石棺が露出するなど盗掘を受けていた。そのため、長者スクモ塚第1号古墳の調査にあたって、当古墳も早急に調査するとともに、これまでの調査成果を整理して報告する必要がある。そこで、2016年度より、広島大学文学部考古学専攻の実習授業（野外考古学実習）として、長者スクモ塚古墳群の測量調査ならびに発掘調査を行う運びとなった<sup>(3)</sup>。本報告は長者スクモ塚古墳群第2次調査の一環として行われた、長者スクモ塚第2号古墳測量調査の概要をまとめたものである<sup>(4)</sup>。



第1図 長者スクモ塚古墳群周辺遺跡分布図 (1/25,000)

1. 長者スクモ塚古墳群 2. 宮の前遺跡 3. 鏡千人塚遺跡 4. 鏡山古墳 5. 八幡山古墳 6. 古市古墳  
7. 京塚古墳 8. 卯月城古墳群 9. 龍王山古墳 10. 松賀山遺跡 11. 松賀古墳 12. 西の谷古墳

## 2. 長者スクモ塚第2号古墳の環境

### (1) 地理的環境

長者スクモ塚第2号古墳の所在する広島県東広島市は広島県のほぼ中央にある賀茂台地西部に位置している。賀茂台地上には西条・志和・白市盆地といった浸食盆地が複数形成されており、東広島市街地は標高200～300mの山々で囲まれた西条盆地を中心に広がっている(藤田 1977)。

### (2) 歴史的環境

東広島市内には多数の遺跡が知られているが、ここでは古墳時代の主要な遺跡を概観する。

当地域における最古の古墳として挙げられるのが高屋町に所在する才が迫第1号古墳である。才が迫第1号古墳は墳丘長約11.2mの方墳であり、構造の異なる竪穴式石槨2基を埋葬施設にもつ。丘陵背面の周溝内より出土した土器から、4世紀初頭の築造とされている(大上 1993)。これにつづく古墳として挙げられるのが、高屋町に所在する原の谷古墳である。原の谷古墳は墳丘径(長)約23.5mの円墳もしくは方墳であり、竪穴式石槨1基を埋葬施設にもつ。盛土内より出土した土器から、4世紀前半の築造とされている(出野上 2003)。このように古墳時代前期前半では盆地東部の高屋町を中心に古墳が築造されるが、前期後半になると盆地西部の西条町でも古墳が築造されるようになる。西条町に所在する白鳥古墳は削平などによって墳丘規模や埋葬施設などが明らかでないものの、仿製三角縁神獸鏡や素環頭大刀の出土が伝えられており、4世紀後半の築造とされている(古瀬 1982)。同じく西条町に所在する丸山神社第1号古墳は墳丘長約42.9mの帆立貝形古墳とされるが、未発掘のため埋葬施設は明らかでない。墳丘背面で表採された壺形埴輪から、4世紀末の築造とされている(藤野 2015)。同じく西条町長者スクモ塚第1号古墳は墳丘長約63.0mの前方後円墳(帆立貝形古墳)であるが、未発掘のため埋葬施設は不明である。墳丘周辺で表採された埴輪から、4世紀末から5世紀初頭の築造とされ、後述の三ッ城第1号古墳に先行する(下江・永野ほか2018)。また、高屋町に所在する千人塚古墳は墳丘径約24.0mの円墳であり、箱形石棺2基を埋葬施設にもつ。現在は散逸しているが、珠文鏡や碧玉製石釧の出土が伝えられており、4世紀末の築造とされている(古瀬編 2010)。

古墳時代中期の古墳としては、西条町三ッ城第1号古墳が挙げられる。三ッ城第1号古墳は墳丘長約92.0mの前方後円墳であり、特殊な構造の竪穴式石槨2基と箱形石棺1基の計3基を埋葬施設にもつ。墳丘に並べられた埴輪や造出に置かれた須恵器から、5世紀前葉の築造とされている(石井編 2004)。三ッ城第1号古墳以降、有力墓の造営は途絶えるが、高屋町に所在する森信第1号古墳は墳丘長約30.0mの前方後円墳とされている。現在は散逸しているが、雲珠や須恵器などの出土が伝えられており、5世紀末から6世紀初頭の築造とされている(石井 1990)。

後期になると、西条町に所在する助平古墳(石井 1992)や御藪宇龍王山古墳(脇坂 1997)、高屋町に所在する原田岡山第1号古墳(恵谷 1994)のように、横穴式石室を埋葬施設にもつ古墳が多く築造されるようになる。

ところで、上記の古墳はいわゆる有力墓とされるものであるが、その他の中小古墳としては高屋町鍵向山古墳群（是光 1975）や木原向山古墳群（金井 1975）、西条町大槇古墳群（藤岡 1993）、簾古墳（伊藤 1985）、志和町蛇迫古墳群（恵谷 2005）などが挙げられる。

### 3. 調査方法と日程

#### (1) 調査方法

測量図の作成は発掘調査において設定した調査グリッド<sup>(5)</sup>の交点杭と任意に設定したトラバース杭による開放トラバースを用いた平板測量によって行い、1996年の測量調査時に作成された測量図に等高線などを加筆・修正した。

**現状の確認** まず、1996年度の測量図と現状が一致するかどうかの確認を行った。1996年度の測量図に記載されている杭のうち、現在確認することのできた杭は国土調査により定められた境界杭のみであった。そのため、この境界杭を P.23 と再設定し、この杭を基準にして地表に露出した箱形石棺 ST01 の長側石の隅 2 点を視準したところ、測量図と現状が一致した。また、P.23 は 1996 年の調査時に標高の基準とされたようであり、1996 年度の測量図に標高数値 (241.470m) が記載されていた。確認のため、第 1 次調査（長者スクモ塚第 1 号古墳測量調査）で標高の基準とした P.0 から直接水準移動を行ったところ、1996 年度の標高と一致したため、この値を使用した。この後、実際に標高を数点測ったところ、1996 年の測量図と現状がほぼ一致したため、1996 年当時と現在で大きな地平の改変はないものと判断した。

なお、直接水準移動および平板測量の際には TOPCON 社製のオートレベル AT-G1、SOKKIA 社製のオートレベル C310 を使用した。

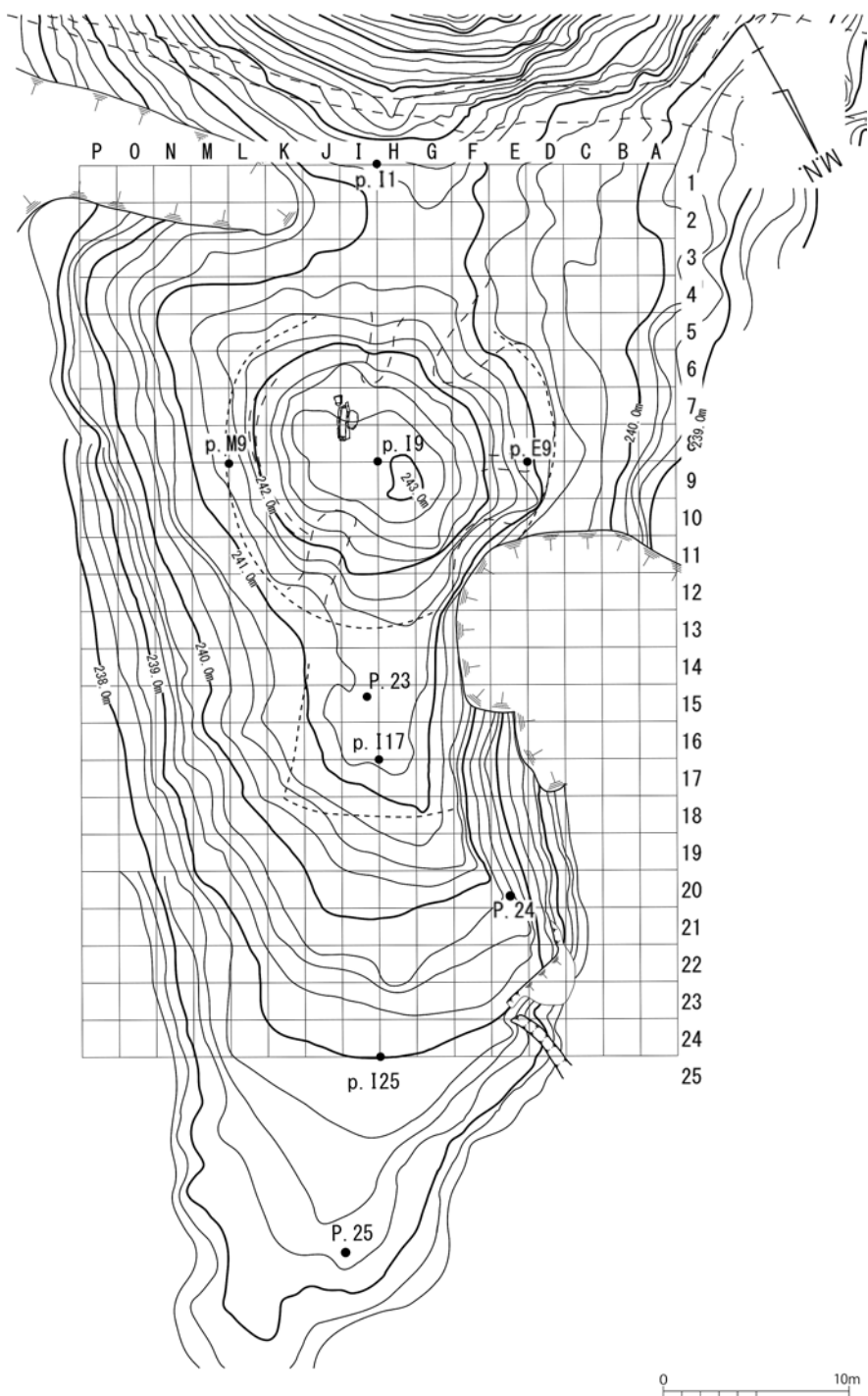
**トラバースの設定（第 2 図）** 平板測量にあたっては、先述の P.23<sup>(6)</sup> と任意に設定した P.24、そして発掘調査の際に設定した調査グリッドの交点に設置した杭のうち p.I9、p.I17、p.I25、p.E9、p.M9 を用いた開放トラバースを設定した。なお、P.24 の設定に関しては p.I25 上に平板を設置し、P.23 および p.I17 をそれぞれ前視点、後視点として視準することで図面上の位置に対して許容範囲を越える誤差がないことを確認した。

**平板測量** 測量は一台の平板を用いて行い、1996 年度の測量図に準じて、等高線間隔 25cm、縮尺 100 分の 1 の平板測量図を作成した。測量点の計測については縮尺の大きさを考慮し、測量領域全体に渡り ± 5 mm を許容範囲とした。

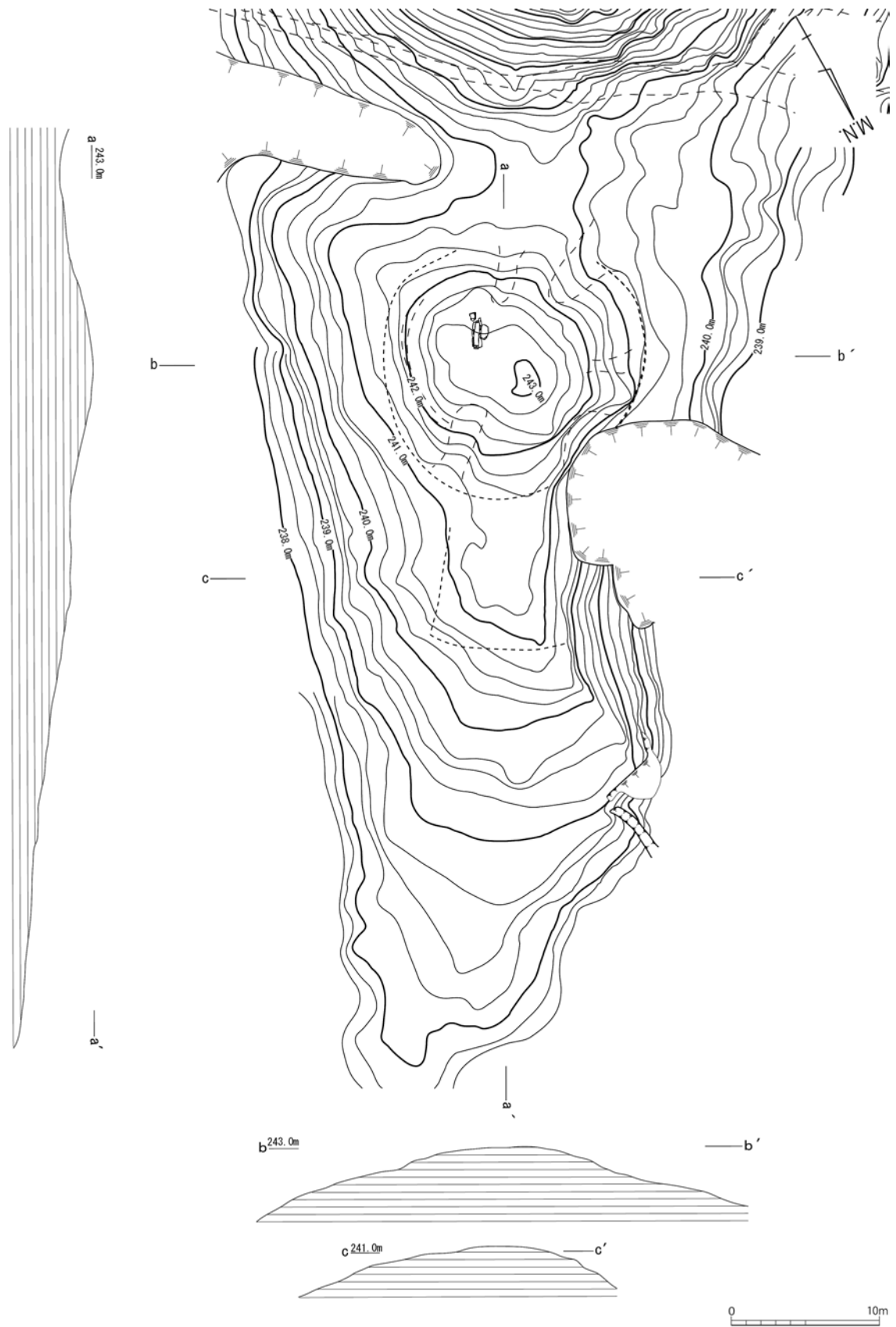
#### (2) 調査日程

第 2 号古墳の測量調査は 2017 年 9 月 2 日から 15 日にかけて、長者スクモ塚古墳群第 2 次調査として実施した。第 2 号古墳発掘調査と並行して行い、9 月 2 日から 3 日に樹木の伐採や墳丘の清掃を行った。4 日の休日を挟んで、5 日に先述した P.0 から P.23 まで水準測量を行う水準測量班と、1996 年度の測量図と現状がほぼ一致するかどうかを確認する現状確認班に分かれ、現状確認班は 5 日に 1996 年度の測量図と現状が一致することを確認した。水準測量に関しては 5 日に往路を達成し、水準測量の結果を確認するための復路は 6 日に達成した。7 日は雨天により作業が中止となったため、翌 8 日に P.24 を設置し、開放トラバースを設

定した。その後、9日から平板測量を開始し、おもに墳丘北側と西側の周辺地形の等高線を1996年度の測量図に追加した。11日の休日を挟んで、14日まで周辺地形測量を行い、15日の午前に傾斜変換の測量を行った。15日午後には全ての作業を終え、第2号古墳発掘調査に合流した。



第2図 測量杭配置図 (1/400)

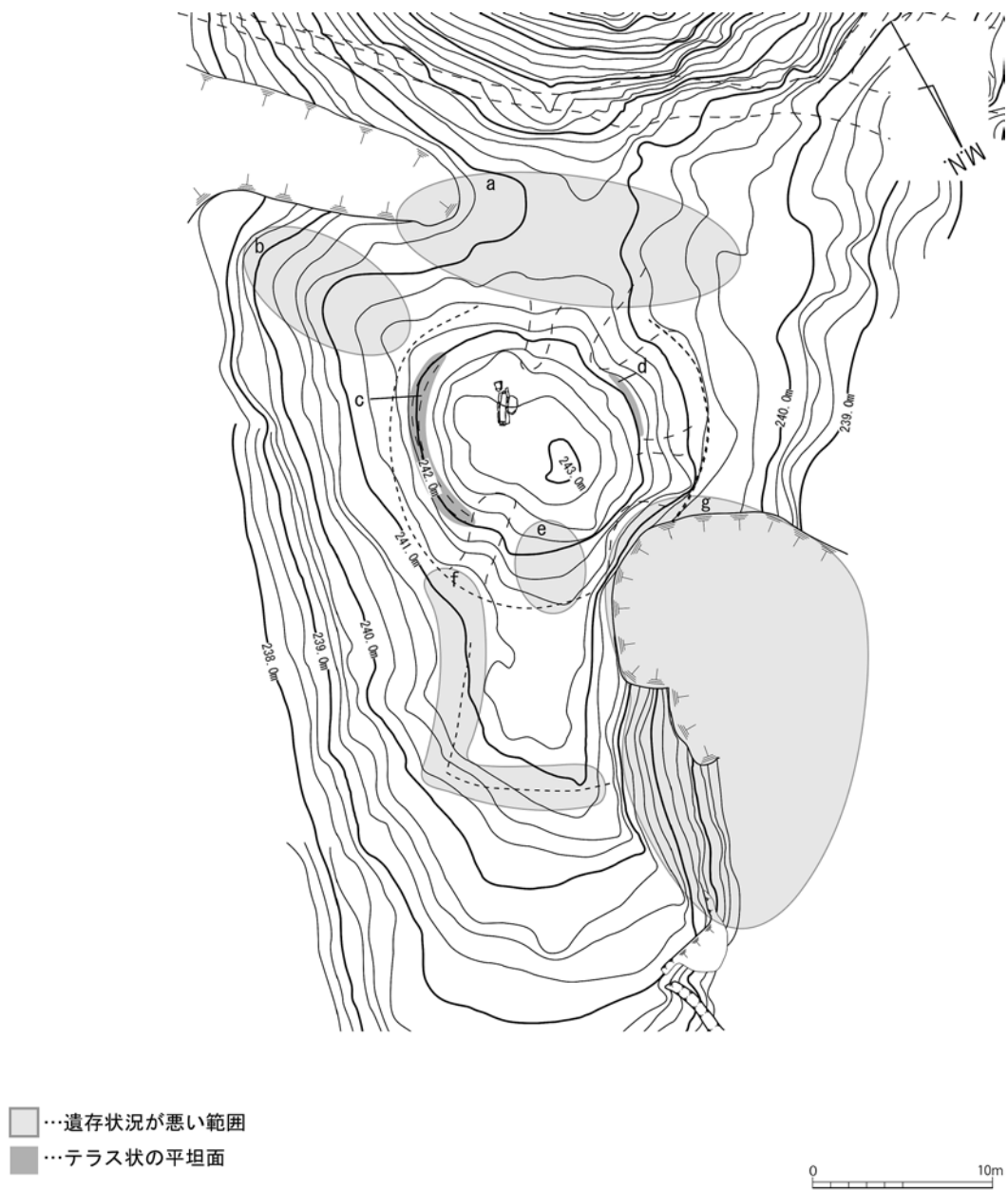


第3図 長者スクモ塚第2号古墳墳丘測量図 (1/400)

#### 4. 測量調査の成果

##### (1) 墳丘の現状

**後円部** 後円部は全体的に削平を受けているが、概ね円形を呈すと考えられ、墳丘西側では241.75m、東側では241.50m付近で傾斜変換を確認することができる。また、墳丘西側と東側を中心に、242.00m付近にはテラス面のような平坦面が広がっているが（第4図c、第4図d）、墳丘本来の地形であるかどうかは不明である。墳丘南西側は削平を受けて平坦面が広がっており（第4図a）、墳裾らしき傾斜変換は確認できない。また、墳丘南側では等高線が角ばっており（第4図b）、一見すると方墳のようにみえるが、この部分は排土や流土が堆積していると思われ、墳丘本来の地形ではない。また、既に箱形石棺が露出しているこ



とから、墳頂部はほとんど削平されたものと思われ、現状での最高所は243.06mであるが、本来はあと1～2mは高い墳丘をもっていたと考えられる。周溝、葺石はいずれも確認されておらず、第2号古墳周辺では埴輪片なども表採されていない。

**前方部** 前方部は241.00～241.50m付近で傾斜変換が認められるが、明瞭なものではなく、周溝などによって区画された痕跡も確認できない。前方部南側では、後円部と前方部を繋ぐ隆起斜道らしきものは確認できるが、後円部が盗掘された際の排土や流土が堆積した可能性も捨てきれない(第4図e)。また、前方部前面は撥形を呈しているが、この付近は腐葉土の堆積が顕著であり、墳丘本来の地形ではない可能性が高い(第4図f)。前方部西側は大きく削平を受けたため、くびれ部は確認できず、前方部墳裾も明確ではない(第4図g)。以上のことから、前方部の存在については懐疑的とならざるをえないが、円墳であるという決定的な証拠も得られていない。最終的な判断は発掘調査の成果を待つ必要があるが、ここでは前方後円墳と円墳の両者の可能性を考えておきたい。

## (2) 墳丘規模

以上のことから、長者スクモ塚第2号古墳は墳丘径約22.0m、現状の高さ2.2mの円墳、もしくは墳丘長約28.5m、後円部径約18.3m、現状の後円部高2.2m、前方部長10.2m、前方部前面幅約8.8m、前方部高約0.75mの前方後円墳と推定される。前方後円墳の場合、墳丘主軸は北東-南西である。

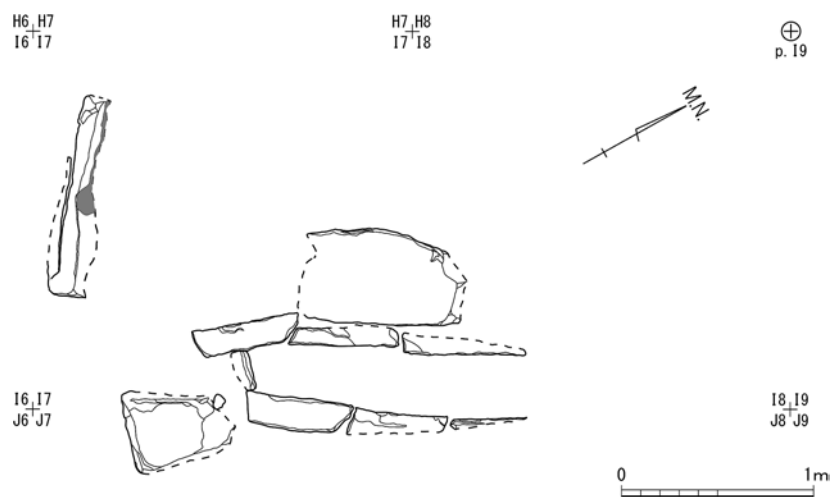
## (3) 埋葬施設(第5図、図版第2b)

後円部中心からやや南寄りの地点で箱形石棺1基が露出しており、この箱形石棺をST01と呼ぶ。北側の短側石など、一部が埋もれているものの、ST01の現状での規模は内法で長軸1.46m、北側短軸0.33m、南側短軸0.24mである。周囲には蓋石と思われる石材が散乱しており、この蓋石と石棺内側には赤色顔料が塗布されていた。ST01が墳丘中心から南寄りの地点で確認されたことから、中心的な埋葬施設は他にあったものと推察される。第5節で詳述するが、獣形鏡1面、刀子片1点、管玉2点、人骨の出土が伝えられている。

## 5. 考察

### (1) 築造年代

今回の調査では築造年代がわかるような遺物は出土していない。墳形も円墳、もしくは不整形な前方後円墳であり、詳細な時期比定は困難な状況にある。立地的には丘陵先端の第1号古墳より後出す



第5図 ST01露出状況(1/40)

ると考えられ、また、現第2号古墳から出土したと伝えられる獣形鏡は三ツ城第1号古墳出土の獣形鏡と近い時期のものとされている（松崎・木下 1954）。こうしたことから、長者スクモ塚第1号古墳に後出する5世紀初頭前後の築造としておきたい。

## （2）名称と副葬品

先にも述べたように、当古墳はこれまで何度か調査が行われたようであり、その概要についてはいくつかの文献に記載がある<sup>(7)</sup>。しかし、文献をみただけでは古墳の位置関係や名称などが錯綜しており、不明瞭な部分が多い。そこで、今回の報告にあたってこれらの文献を再掲し、長者スクモ塚第2号古墳におけるこれまでの知見について整理を行いたい。

### ①鈴木 誠・池田次郎1950「廣島懸下箱式石棺出土の人骨に就て」

「(前略) 古墳は安芸口(筆者註：安芸国)賀茂郡西條町(筆者註：西条町)御菌宇区長者に存在する。(中略) スクモ塚はこの盆地の東南、西北から伸びた丘陵の東南端に近い標高260m、比高60mのおね(筆者註：尾根)上にある。この先端は直径約5mの円墳をもち、鞍部を挟んで当古墳に接する。当古墳も直径5m位の円墳で、前述の如く一石棺は既に発掘され、原形は知らないが、側石、蓋石などは残置されている。その石棺の現位置から2mと離れぬ所に他の石棺が発見された。第二の石棺が長さ内法165cm、巾30cm、深さ30cmで蓋石は3枚、側石は3枚と2枚、頭、及び足部は夫々1枚である。石はすべて花崗岩を使用し割合に厚く、蓋石は表土から15cm位であった。方向はE52°Sである。

遺物は根吉氏によれば第一石棺より小形の鉦、管玉等出土した由であるが、現在は散逸して居り、第二の石棺からは何物も発見を得なかった。

第一石棺の原寸法は知る可くもないが、割石等の大きさが第二石棺のそれと各同じ位である点からすれば、長さも大体似たものであったと思はれる。(以下略)」

### ②松崎寿和・木下 忠 1954「古墳の歴史的背景」

「(前略) 三ツ城古墳の東側に接する江熊丘陵の尾根の上に、封土はもたないが2ヶ所で箱式棺が発見されており、吉土実の大唐田、御菌宇のスクモ塚、下三永の夫婦茶屋にもそれぞれ同じ様式のものが見られる(第8図)。江熊のものからは遺物は発見されていないが、下三永からは人骨と鉄刀子が出土した。また、スクモ塚からは人骨と獣形鏡・管玉・刀子などが発見されている。(以下略)」

### ③豊 元国編1954「廣島懸古墳綜覧」

#### すくも塚第3号古墳

1. 賀茂郡西条町大字御菌宇小字長者原
2. 円墳、径8m、高2m
3. 箱式石棺2
4. (1) 長1.55m、幅0.3m  
(2) 不明
5. 漢式鏡、管玉、人骨、刀子
6. 東京国立博物館



## 7. 池田次郎氏調査、人骨は広島医大に保存

## ④池田次郎1954「三ッ城古墳出土人骨、並びに広島懸下出土の古墳人骨について」

「(前略) 安藝國賀茂郡 御藪宇長者スクモ塚

三ッ城古墳に最も近く、西条盆地をめぐる東南の丘陵上にあり、その尖端及び尖端よりやや西南寄りにそれぞれ円墳が見られる。人骨の発見されたのは西南の小円墳で、その中央には組み合わせた石棺2個がある。その一は長さ105cm、幅30cm、深さ30cmである。他は原状を止めていないが、これとほぼ同大で、人骨、小形の鏡、管玉、刀子を保存していた。(以下略)」

## ⑤松崎寿和 1979「スクモ塚古墳群」

「21 スクモ塚古墳群 東広島市西条町御藪宇字長者原

## ※古墳時代前期

西条盆地の東南部の丘陵に三基の円墳がある。一号墳は、直径約四〇メートル、高さ六メートルの円墳で、東南部に方形の造出がある。未発掘のため内部主体は明らかでないが、墳丘に葺石・円筒埴輪がみとめられる。

二号墳は直径一〇メートルの円墳で、墳丘の頂部に箱式石棺がある。

三号墳は直径八メートル、高さ二メートルの小円墳で、墳丘の頂部に二基の箱式石棺があり、そのうちの一基は内法の長さ一・五五メートル、幅二〇～三〇センチメートル、深さ三二センチメートルである。小口に各一枚、側壁に各三枚の板石が使用している。石棺内から人骨・獣形鏡一面、管玉二点、鉄刀子片などが出土している。

いずれも五世紀代のものと推定される。」

## ⑥松村昌彦 1979「スクモ塚1号古墳」

「スクモ塚1号古墳

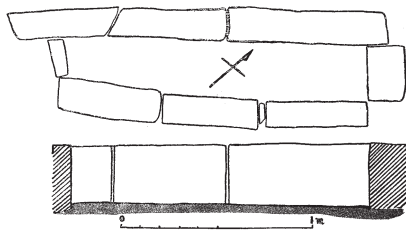
## 1. 東広島市西条町御藪宇字長者原

2. 西条盆地の南側にあつて、通称長者原と呼ばれている比高約30mの独立丘陵上の西端に位置しており、四方をよく眺望できる。この丘陵一帯は弥生時代の長者原遺跡として早くから知られていたが、近年、土取り工事、宅地造成地として、未調査のまま大部分が消滅している。しかし、本古墳は現在、広島大学グランド用地の緑地として保存されている。

古墳は直径42m、高さ約5m、南西側に造り出し部を有する帆立貝式古墳で、東側に周湊がめぐり、墳丘には葺石、埴輪の存在が確認されている。内部主体は未発掘のため不明であるが、隣接の2号は内部主体が箱式石棺で、副葬品として獣形鏡1、管玉2、刀子片が出土しており、本古墳は小型の竪穴式石室、あるいは箱式石棺に類似する石棺である可能性が強い。(以下略)」

## ⑦石井隆博 2004「歴史的環境」

「(前略) 5世紀初め頃に築造されたと考えられる古墳に、長者スクモ塚古墳群(西条町御藪宇)がある。第1号古墳は、全長約63mの前方後円墳で、埋葬施設は未調査のため不明であるが、墳丘に葺石があり、埴輪をもっていることが知られている。これまでに出土している円筒埴輪は、黒斑をもち、透孔が方形の物をもっていることから、三ッ城第1号古墳に先



第6図 文献②に記載されている箱形石棺  
(1/40) (松崎 1954)

行する古墳と推定されている。また、第1号古墳の北側にある第2号古墳は、不整形な前方部を北に向ける全長約25m前後の前方後円墳で、箱形石棺が露出している。ここからは、獣形鏡1、管玉2、刀子破片、人骨などが出土しているが、築造時期は明確でない。(以下略)」

以上が長者スクモ塚第2号古墳に関するこれまでのおもな記述内容である。これらの情報をまとめると、まず、文献③、⑤から、現在第2号古墳とされている古墳は、従来は第3号古墳と呼称されていたことがわかる。さらに文献③、⑤から、現第2号古墳(旧第3号古墳)には箱形石棺が2基存在しており<sup>(8)</sup>、1基は1950年代には既に破壊され、他の1基は文献②、⑤に掲載された実測図から、現第2号古墳に露出している箱形石棺(ST01)であることがわかる(第6図)。また、文献②、③、⑤から、獣形鏡・刀子片・管玉がST01より出土しており、文献③の注記から、それらは東京国立博物館に所蔵された後、散逸したことがわかる。また、文献⑥、⑦では現第2号古墳が第1号古墳に隣接すると述べられており、現第2号古墳が第3号古墳から第2号古墳へと名称が変更されたのは文献⑥の記述が原因の一つとなった可能性がある。

ここで問題となるのは文献①と文献④である。文献①では古墳群のある丘陵の東南端に近い位置に鞍部を接して2基の円墳があるとされており、これが第2号古墳と第3号古墳に当たると推察される。文献①、④で取り上げられている古墳は現第3号古墳(旧第2号古墳)と思われ、文献①には箱形石棺の実測図が掲載されているが、この石棺と形状・寸法が合致する石棺は現状確認できていない。また、文献①、④では現第3号古墳(旧第2号古墳)の石棺は2基と報告されているが、文献③、⑤では1基とされている。1950年に池田氏が報告した後、数年のうちに石棺が消滅した可能性もあるが、確証はない。

いずれにしても、現在長者スクモ塚第2号古墳とされている古墳は、従来第3号古墳と呼称されており、箱形石棺を2基もっていたこと、そして獣形鏡などの遺物が出土したが、現在は散逸していることはほぼ間違いのない事実としてよい。一方、現在第3号古墳とされている古墳は現第2号古墳の付近に存在していたが、現状では確認できず、埋葬施設や副葬品などの詳細も不明といわざるをえない。

## 6. おわりに

長者スクモ塚第2号古墳の測量調査から、当古墳が前方後円墳もしくは円墳である可能性を指摘した。また、当古墳におけるこれまでの知見を整理し、現在第2号古墳とされている古墳は、従来第3号古墳と呼称されていたこと、現第2号古墳には石棺が2基存在しており、獣形鏡などの副葬品が出土したが、現在は散逸していることなどを改めて指摘した。詳細な墳丘規模や墳形、ST01の構造など、今後明らかにするべき課題は多く残されている。第2号古墳を含めた長者スクモ塚古墳群は西条盆地における首長墓系譜を辿る上で重要な古墳と

いえよう。今後にも継続した調査を行っていく必要がある。

本古墳の測量調査は、墳丘の詳細な測量図を作成してくださった諸先輩方の努力と成果に基づいたものであり、とくに広島大学名誉教授の古瀬清秀氏には、1996年当時の情報を提供していただき、多大なご協力を賜りました。また、東広島市教育委員会の妹尾周三氏・中山学氏・石垣敏文氏には調査の準備などで多大なご助力を賜りました。また、広島県立歴史民俗資料館の村田晋氏と島根県埋蔵文化財調査センターの今福拓哉氏には、調査や本稿の執筆に関して多くのご教示を賜りました。また、広島大学大学院生の名村威彦氏・真木大空氏には本稿の執筆に関して様々なご教示を賜りました。また、広島大学大学院文学研究科の野島永教授・竹広文明教授には現地までのご引率や調査のご指導、本稿の執筆に至るまで多くのご教示を賜りました。記して感謝いたします。

## 註

- (1) 長者スクモ塚第1号古墳の測量調査成果は本誌「東広島市長者スクモ塚第1号古墳測量調査」(下江・永野ほか2018)に掲載されている。
- (2) 1996年度の測量調査は当時広島大学文学部助教授(現、広島大学名誉教授)の古瀬清秀氏と助手(現、比治山大学現代文化学部教授)の安間拓巳氏の指導のもと、当時大学院生の中山悦朗、内山ひろせ、三ッ木貴代志、小川晃弘、近藤徹也、学部生の宇都宮菜乃、亀井美和、栗山葉子、近藤裕樹、下垣 豪、谷川正洋、船越信弘、渡邊秀樹の諸氏が行った。
- (3) 長者スクモ塚古墳群第1次調査では第1号古墳の測量調査、第2次調査では第2号古墳測量調査ならびに発掘調査を実施した。なお、第2号古墳の発掘調査成果については今後、その概要報告を行う予定である。
- (4) 2017年度の測量調査は教員および当時大学院生の名村威彦の指導のもと、学部生の永野智朗、南條 花、妻藤祐太、田口隆晟、橋本安奈が行った。本稿の作成にあたっては永野が執筆・編集した。
- (5) 調査グリッドは測量調査と並行して行った第2号古墳発掘調査の際に設定したものである。第2号古墳を前方後円墳と仮定したうえで、墳丘主軸に沿う形で1グリッド2m四方のグリッドを設定した。
- (6) 調査で使用した杭の名称については、第1号古墳ならび第2号古墳のトラバース杭はP.1のように大文字のPを用いた。また、第2号古墳の調査グリッドの交点はp.I9のように小文字のpとグリッド番号を用いた。
- (7) 長者スクモ塚第2号古墳の概要については以下の文献に記載がある。
  - ①鈴木 誠・池田次郎 1950 「広島懸下箱式石棺出土の人骨に就て」『人類学輯報』第4輯、大阪市立大学医学部解剖学研究室、1～8頁。
  - ②松崎寿和・木下 忠 1954 「古墳の歴史的背景」『三ッ城古墳』広島懸教育委員会、11～13頁。
  - ③豊 元国編 1954 「広島懸古墳綜覧」『三ッ城古墳』広島懸教育委員会、65～171頁。
  - ④池田次郎 1954 「三ッ城古墳出土人骨、並びに広島懸下出土の古墳人骨について」『三ッ城古墳』広島懸教育委員会、48～51頁。
  - ⑤松崎寿和 1979 「スクモ塚古墳群」『広島県史』考古編、広島県、436頁。
  - ⑥松村昌彦 1979 「スクモ塚1号古墳」『広島県の主要古墳』芸備友の会、38～39頁。
  - ⑦石井隆博 2004 「歴史的環境」『史跡三ッ城古墳発掘調査報告書』東広島市教育文化振興事業団、3～9頁。なお、文献③は表記されていたものを簡条書きに書き換えたものであり、「1」は所在地、「2」は

墳形、墳丘規模、「3」は埋葬施設の形態と数、「4」は埋葬施設の寸法、「5」は出土遺物、「6」は遺物の所蔵者、「7」は備考を示す。また、文献⑥の「1」は所在地、「2」は古墳の概要を示すものである。

(8) 土地所有者の松浦勝巳氏によると、松浦氏が幼少の頃には現第2号古墳には石棺が2基存在していたとのことであり、文献③、⑤の記述と整合性がとれている。

#### 引用・参考文献

- 池田次郎 1954 「三ッ城古墳出土人骨、並びに広島懸下出土の古墳人骨について」『三ッ城古墳』広島懸教育委員会、48～51頁。
- 池西美咲・近藤直毅ほか 2016 「三次市三良坂町長字根10号墳の測量調査」『広島大学大学院文学研究科考古学研究室紀要』第8号、57～78頁。
- 池西美咲・實盛良彦ほか 2016 「庄原市新庄町新庄龍王1号墳の測量調査」『広島大学大学院文学研究科考古学研究室紀要』第8号、47～56頁。
- 石井隆博 1990 『森信第10号古墳発掘調査報告書』東広島市教育委員会。
- 石井隆博 1992 「助平古墳」『西条第一土地区画整理事業地内埋蔵文化財発掘調査報告書』東広島市教育委員会、81～97頁。
- 石井隆博 2004 「歴史的環境」『史跡三ッ城古墳発掘調査報告書』東広島市教育文化振興事業団、3～9頁。
- 石井隆博編 2004 『史跡三ッ城古墳発掘調査報告書』東広島市教育文化振興事業団。
- 伊藤健司 1985 『簾古墳発掘調査報告書』東広島市教育委員会。
- 恵谷泰典 1994 「原岡岡山古墳群」『山陽自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』X、広島県埋蔵文化財調査センター、139～155頁。
- 恵谷泰典 2005 『蛇迫第1～4号古墳・蛇迫遺跡発掘調査報告書』東広島市教育文化振興事業団。
- 大上裕士 1993 「才が迫遺跡」『山陽自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』IX、広島県埋蔵文化財調査センター、19～44頁。
- 金井亀喜 1975 「木原向山古墳群」『賀茂カントリークラブゴルフ場内遺跡群発掘調査報告』広島県教育委員会、36～51頁。
- 是光吉基 1975 「鍵向山第2号古墳」『賀茂カントリークラブゴルフ場内遺跡群発掘調査報告』広島県教育委員会、33～35頁。
- 下江裕貴・永野智朗ほか 2018 「東広島市長者スクモ塚第1号古墳測量調査」『広島大学大学院文学研究科考古学研究室紀要』第10号、広島大学大学院文学研究科考古学研究室、41～70頁。
- 鈴木 誠・池田次郎 1950 「広島懸下箱式石棺出土の人骨に就て」『人類学輯報』第4輯、大阪市立大学医学部解剖学研究室、1～8頁。
- 出野上靖 2003 『原の谷古墳・原の谷遺跡発掘調査報告書』東広島市教育文化振興事業団。
- 豊 元国編 1954 「広島懸古墳総攬」『三ッ城古墳』広島懸教育委員会、65～171頁。
- 平尾英希・池西美咲ほか 2015 「三次市吉舎町海田原29号の測量調査」『広島大学大学院文学研究科考古学研究室紀要』第7号、広島大学大学院文学研究科考古学研究室、93～108頁。
- 藤岡孝司 1993 「大槇第1号古墳」『西条第一土地区画整理事業地内埋蔵文化財発掘調査報告書』II、東広島市教育委員会、78～90頁。
- 藤田 隆 1977 「東広島市と黒瀬町」『広島県史』地誌編、広島県、862～878頁。
- 藤野次史 2015 「東広島市丸山神社古墳群の測量調査」『広島大学埋蔵文化財調査研究紀要』第6号、広島大学総合博物館埋蔵文化財調査部門、97～134頁。
- 古瀬清秀編 2010 『千人塚古墳』東広島教育委員会・広島大学文学研究科考古学研究室。
- 松崎寿和 1979 「スクモ塚古墳群」『広島県史』考古編、広島県、436頁。

- 松崎寿和・木下 忠 1954 「古墳の歴史的背景」『三ツ城古墳』広島懸教育委員会、11～13頁。  
松村昌彦 1979 「スクモ塚1号古墳」『広島県の主要古墳』芸備友の会、38～39頁。  
村田 晋ほか 2014 「三次市吉舎町海田原20号墳の測量調査」『広島大学考古学研究室紀要』第6号、広島大学大学院文学研究科考古学研究室、103～115頁。  
脇坂光彦 1997 「御菌宇龍王山古墳の発掘調査」『芸備』第26集、芸備友の会、120～147頁。

## **Topographical Survey of the Chōja Sukumozuka Mounded Tomb No.2 in Saijō, Higashi-Hiroshima City**

**Tomoro NAGANO**

The Chōja Sukumozuka mounded tomb No.2 is a keyhole-shaped or round mounded tomb located in Saijō-chō, Higashi-Hiroshima City, Hiroshima Prefecture. Because it was robbed in the 1950s and a box-shaped stone coffin (*hakogata sekkan*) was exposed on its mound, there was an urgent necessity to examine this mound. In September 2017, as part of “Field Practice in Archaeology A and B” for the archaeology majors at the Hiroshima University School of Letters, we conducted a topographical survey of this mound to clarify its scale, shape, and date of construction. The results of this survey indicated that the Chōja Sukumozuka mounded tomb No.2 is a keyhole-shaped mounded tomb with a diameter 28.5m, or a round mounded tomb with a diameter 22.0m of the Kofun period. The date of construction of this mounded tomb is not clear; however, we believe that this mound was constructed after the beginning of 5th century AD due to the spatial relation to the Chōja Sukumozuka mounded tomb No.1. In addition, as a result of reviewing previous information about this mounded tomb, we would like to point out that the mounded tomb, which is currently regarded as No.2, was once referred to as No.3, and there were two box-shaped stone coffins.

長者スクモ塚第2号古墳

図版第1



a. 古墳群遠景（西から）



b. 推定後円部全景（南から）

長者スクモ塚第2号古墳

図版第2



a. 推定前方部全景（北から）



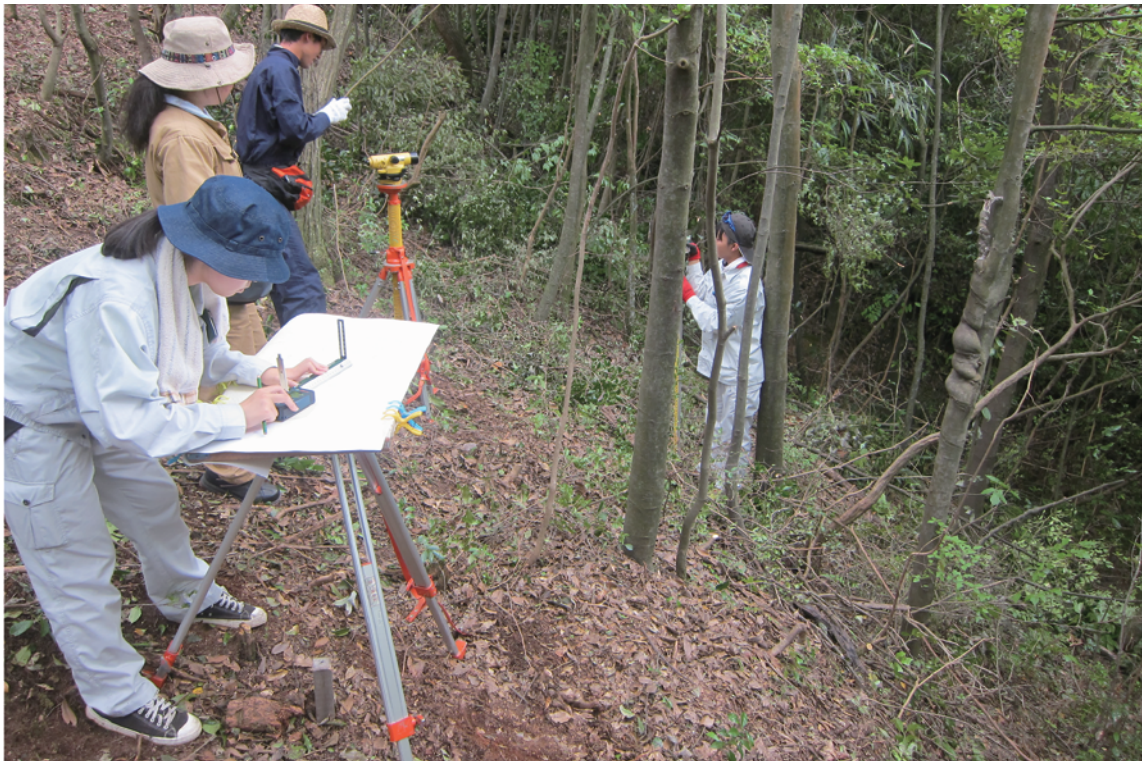
b. ST01露出状況（東から）

長者スクモ塚第2号古墳

図版第3



a. 前方部北側測量調査風景（北東から）(1)



b. 前方部東側測量調査風景（北から）(2)